

# 体育科・保健体育科

梅野栄治・福田忠且・小田啓史

## I 研究の経緯

### 1 研究の背景と中学校卒業時のめざす生徒像

体育科・保健体育科が担う重要な役割は、児童生徒に対して、運動の学習を継続する素地を将来にわたって培うことである。

鈴木は(2008)は、「運動を生涯にわたって継続していくために、自分にとって運動することは大切な価値や意味を持つという観念が形成されていることが何よりも重要である」と述べている。これは、体育の授業において、運動・スポーツとの豊かなかかわりを保障し、学ぶ意義を自覚させる工夫が必要であることを指摘している。また、小林(1994)は、「体育学習において、できるようになろうと努力する過程にこそ意味があり、どこに課題があるのか、何をどのようにすれば課題を克服できるのかが『わかる』ことが大切である」と述べている。つまり、「できればよい」授業から「わかる」と「できる」の関係を大切にする授業へと転換することが重要であると指摘している。

附属東雲小、中学校の体育科・保健体育科(以下、体育科)では、小中連携を方途として学びがつながる授業づくりのあり方を模索している。授業づくりの出発点として、共通の土俵であるⅡ期に注目して、まず、生徒実態を把握するようにした。Ⅱ期に当たる小学5年生と中学1年生を対象に、高橋(1994)が考案した「診断的・総括的授業評価票」を用いて体育授業についての意識調査を実施した。その結果、「めあてを持つ」「工夫して勉強する」などの学び方や認識目標を意識している生徒が少ないこと、「運動の有能感」「できる自信」などの技能に対して自信がある生徒が少ないことがわかった。

そこで、先行研究から得た知見と児童生徒の実態をもとに、体育科では中学校卒業時のめざす生徒像を「思考しながら運動・スポーツを実践し、仲間と協力して課題解決できる生徒」と設定し、「わかり方」に焦点をあてて小中の学びがつながる体育授業のあり方を探る研究を開始した。体育科が捉える「わかり方」については、「運動を行うことを通して、身体で感じた主観的な情報(身体的な認識)と客観的な情報(科学的な認識)を結びつけていく学習プロセス」と定義した。児童生徒に対して、将来にわたって運動やスポーツを主体的に実践する素地を培うべく、「わかり方」を大切しながら、技術認識に支えられたでき具合の高まりの中に運動する楽しさや喜びを求めていけるような授業づくりをテーマとし、発達段階を踏まえた授業仮説を次のように設定した。

区分	I期(小1～小4)	Ⅱ期(小5～中1)	Ⅲ期(中2～中3)
運動へのかかわり	運動の基礎を培う時期	多くの運動やスポーツを経験する時期	一つの運動やスポーツを継続する時期
テーマ	「わかり方」の基盤形成	「わかり方」の充実	「わかり方」の深化
授業仮説	様々な運動遊びや基本の運動を経験し、自己の運動経過のイメージを言語化することで、豊かな運動表象を形成しながら様々な動きや運動感覚を身につけるのではないか。	各運動領域の基礎的な技術を習得する過程で、学ぶ意義や自己の課題を自覚させるなどの「足場づくり」となる授業を行うことで、運動の科学的理解と学ぶ意欲が高まるのではないか。	運動を行うことで得られた経験知と科学知の「のぼりおり」を促す指導を行うことで、課題を設定する力、課題を解決する力が高まるのではないか。

## 2 昨年度の実践的研究の成果と課題

昨年度は、Ⅱ期とⅠ期における障害走、ハードルの教材を取り上げて実践研究を行った結果、次のような成果が認められた。

- ・複式学級の中学年のリズム川跳び走の授業では、川を素早く低く跳ぶという課題を設定した。川を越える踏切と着地をロリズムで表現し、「ポーン」をできるだけ短くするようわかりやすい判断基準を設定したところ、自分でリズムを感じながら走りを修正することができた。このことから、運動経過を言語化する指導は、動きづくりや運動感覚を身につける可能性がある。
- ・小学校6年生のハードル走の授業では、学ぶ意義や自己の課題を自覚させるための手だてとして、自分と友達のハードリングの連続写真を見比べたり、理想の連続図と実際の動きを観察し合ったりする学習活動を取り入れた。その結果、自己のハードリングの課題が意識され、練習に意欲的にとりくむようになった。また、学習カードの記述に具体的な技術に関するキーワードが増えていった。このことから、ハードルの指導において、本実践で行った学習活動は自己の課題を自覚させ、運動の科学的理解や学ぶ意欲を高めるのに有効がある。
- ・中学校1年生のハードル走の授業では、自己の課題を自覚させるための手だてとして、ハードリング技能の善し悪しを判断する基準を教師と生徒が共同で作成する活動が有効かを検証した。基準を生徒と教師が共同で作成するクラスを処遇群、基準を教師が提示するクラスを対照群とし、それぞれのレポート課題の評価と学習意欲の自己評価を分析した。その結果、処遇群の記述には、振り上げ足や抜き足に関する具体的記述が多くあり、評価基準を作成する際に検討した内容と一致していた。また、学習意欲については処遇群の方にのみ学習意欲に有意な向上が認められた。このことから、生徒と教師が評価基準を作成する学習活動は科学的な知識・理解の定着や学習意欲を高めるのに有効な手段になる。

Ⅱ期の児童生徒は自我に目覚める時期であり、少しずつ自分を客観視するようになる。ともすれば、苦手な種目や嫌いな種目に対しては意欲的が低下する可能性がある。Ⅱ期の児童生徒が運動・スポーツに対して意欲的に取り組むようにするには、教師が意図的に、学ぶ意義や自己の課題を自覚させるような手だて、つまり「足場づくり」が重要な指導の要件となる。昨年度は、Ⅱ期とⅠ期において設定した授業仮説について、一教材一単元のみ検証授業を実施し一定の成果を上げることができた。しかし、指導の工夫の有効性を精緻化するには、他の教材・単元でも検証授業を実施する必要がある。また、Ⅱ期の指導の改善を核にしなが、今後はⅠ期やⅢ期の授業づくりの視点を検証することが課題である。

## 3. 発達区分の見直し

定期的な小中教科部会での情報交換や日々の授業実践からの気づき、小学校から高等学校までの学習指導要領が示す運動へのかかわりを考慮し、次年度からⅠ期からⅢ期の区分を次のように変更し、研究を進めることとした。

運動へのかかわり	運動の基礎を培う時期		多くの運動やスポーツを経験する時期	一つの運動やスポーツを継続する時期	
テーマ	「わかり方」の基盤形成		「わかり方」の充実	「わかり方」の深化	
区分	Ⅰ期		Ⅱ期	Ⅲ期	
	前期 (小1～小2)	後期 (小3～小4)	(小5～中2)	(中3)	(高1～高3)

運動学習においてⅠ期後期の小学校3、4年の時期は、基本動作の習得や運動感覚、調整力の発達のピークを迎えるためゴールデンエイジといわれている。かつては、遊びの中で自然に運動感覚を身につけていたが、近年はより生活が豊かになり、遊びの変容や運動機会の減少のため、体育科がより

意識的に運動の基礎づくりを行い、Ⅱ期で多くの運動やスポーツを経験する基盤を形成しておく必要があると考えた。Ⅱ期は、小学校5年生から中学校2年生までに伸ばすこととした。中学校学習指導要領では中学1年と中学2年の2年間で、すべての運動領域が必修になったからである。Ⅲ期は中学3年のみとした。中学3年から選択授業が導入されるため、高等学校での学びの接続を意識する必要があると考えたからである。

## Ⅱ 本年度の研究計画

### 1 研究の目的

昨年度得られた知見をもとに、今年度は他の単元を取り上げて学習内容のつながりや指導の工夫に関する実践的研究を継続する。今年度は、ボール運動・球技の中の「ネット型」の教材を扱う。

ボール運動・球技を取り上げた理由は、新学習指導要領の実施に伴い、球技の領域において「ゴール型」「ネット型」「ベースボール型」という3つの類型で示すことになった。この3分類は小学校の3、4年のゲーム領域の段階から高校の球技まで、一貫して採用されたため、各学年段階でどのようなボール運動を位置づけていくのかということが重要な課題となった。また、球技によって何を学ばそうとするのかが議論され、「ボールを持たない時の動き」に焦点をあて、ゲームパフォーマンスを高める指導の工夫が強調されるようになった。このことから、現在、球技の領域において、校種間の連携を意識して学習内容や指導方法を検討し、学びがつながる授業づくりのあり方が求められているからである。

また、球技の中の「ネット型」に注目したのは、「ネット型」の中で最もポピュラーな種目は、バレーボールは世界的に広く普及してきた球技だからである。バレーボールは競技スポーツとしても、レクリエーションスポーツとしても行われている。国際的にも、国内でも広く普及し、多くの人に親しまれているスポーツである。その理由としては、ネットによる境界線が相手チームとの直接的な接触を防ぎ、危険性が少ないこと、そして、年齢や性別に制約を受けず、誰もが楽しめるレクリエーションの要素があげられる。そのため、生徒が大人になっても出会う可能性が高く、生涯スポーツの観点から学ぶ価値の高い教材だからである。

以上のことから、ボール運動・球技の運動領域における「ネット型」の授業づくりを行い、Ⅱ期とⅢ期の授業仮説を検証していくことを目的とする。

### 2 研究仮説

#### (1) Ⅱ期 複式高学年

バレーボールの簡易ゲーム後、ゲーム中の失敗した場面を技能、判断、ポジショニングの3つの視点に基づいてふり返らせ、チームの課題を自覚させる指導を行えば、チーム課題を解決する適切な練習方法を選択し、意欲的に練習に取り組むようになるのではないか。

#### (2) Ⅱ期 小学5年

ネット型ゲームのアタック・プレルボールにおいて、児童の自己評価、相互評価の視点を「ボールを持っていないときの動き」に焦点化するならば、児童の「わかり方」が充実し、意図的な関係プレーを意識した役割行動や、作戦を実行することができるのではないか。

#### (3) Ⅲ期 中学3年

バレーボールのゲームにおいて、めざすゲームの様相「科学知」と実際のゲームの様相「生活知」のギャップを比較したり、ふり返りを行う際の発問を行ったりして、ゲームにおける「科学知」と「生活知」ののびりおりを促すようにする。この指導によって、自己の課題を顕在化させたり、戦術的な気づきを高めたりして、課題解決に向けた取り組みを主体的に行うことができるようになるのではないか。また、ゲームパフォーマンスを高めることができ、バレーボールゲームのおもしろさを実感さ

せることができるのではないか。

### 3 研究方法（検証方法）

#### （1）Ⅱ期 複式高学年

単元前後の質問紙による学習意欲の調査を行いその変容を分析するとともに、授業中の取り組む様子から学習意欲に関して考察する。また、学習カードの記述内容の変容と、課題に対する練習方法が適切に選択されたかを検証し、科学的な理解が高まったかを考察する。

#### （2）Ⅱ期 小学5年

単元前後の質問紙による学習意欲の調査を行いその変容を分析するとともに、授業中の取り組む様子から学習意欲に関して考察する。また、ゲームで発揮される「ボールを持たないときの動き」の高まりと学習カードの記述内容の変容から、運動の科学的な理解の高まりを考察する。

#### （3）Ⅲ期 中学3年

毎時間行う形成的評価と学習ノートの記述や、グループノートの記述を分析し、ゲームの状況に対して、課題の設定が適切であったかどうかを分析する。また、ゲームで発揮されたパフォーマンスの評価とバレーボールのおもしろさに対する満足度の関係性を探ることで、仮説の検証を行うとともに、授業改善に視点を明らかにする。

### 【参考文献】

- 賀川昌明「体育授業における楽しさの要因分析－学習者の個人特性と因子別Z得点との関連について－」『徳島大学教養部紀要（保健体育）』第17巻, 1984.
- 小林一久『「できればよい」授業から「わかる」「できる」授業への転換』『学校体育』日本体育社, 1994.
- 小林一久『体育の授業づくり論』明治図書, 1985.
- リンダ・L・グリフィン他『ボール運動の指導プログラム－楽しい戦術学習の進め方－』大修館書店, 1999.
- 文部科学省『中学校学習指導要領解説 保健体育編』東山書房, 2008.
- 文部科学省『小学校学習指導要領解説 体育編』東山書房, 2008.
- 西順一「小学校の発達と運動学習」成田十次郎・前田幹夫編著『現代の教育学9 体育科教育学』ミネルブア書房, 1987.
- 鈴木秀人「体育学習と生涯スポーツ」『中学校体育・スポーツ教育指導法講座 ACTUS 理論編』ニチブン, 2008.
- 高橋健夫『新しい体育の授業研究』大修館書店, 1989.
- 高橋健夫他『新しいボールゲームの授業づくり 体育科教育別冊』大修館書店, 2010.